

平成27年度 学力向上アクションプラン

1 学校の状況と地域の実態

- (1) 重点研究授業や学年研究、ベテラン教員も積極的に参加するメンターチームの研修など、日々の研究・研修は自主的に行われ、日常化している。見通しをもった、継続的な研修の体制も確立されつつある。評価も見据えた研究活動の充実には、さらなる工夫も必要ではあるが、開校3年目という新しい学校の歴史の中で、教職員、児童、保護者、地域の方々などで創生していくという共通の目的をもって現実に向かって取り組むことができている。
- (2) 配慮を要する教育的支援が必要な子どもへの対応を担当や学年の教員、児童支援専任、管理職、スクールカウンセラーで情報を共有しながら、児童にとってよりよい学習・生活体験を行える体制の構築をめざしている。
- (3) 学校以外でも学習の機会をもっている児童が過半数を占め、学力向上の必要性を熱望している保護者の影響もあり、高学年になるにしたがって学力の向上を意識している子どもが多い。学習状況Aの児童が市の平均に比べて約1.5倍、Dの児童は半分以下という調査結果からも実証される。
- (4) 地域で学校ボランティアをしてくださる方も多く、英語、読み聞かせ、児童の安全確保の見守りなどで活躍していただいている。保護者・地域の連携を図る催し物なども積極的に行われている。
- (5) 経済的にも家庭環境的にも安定した家庭が多く、生活面では落ち着いている地域である。

2 中期学校経営方針「確かな学力」達成目標

学力向上に関する指導の目標・方針（平成27年度末の姿）

豊かな『感性』と確かな『学び』をめざし

- 自ら学び、考え、ともに学び（高め）合う子どもを育てます。
- さまざまな学習活動を通して感性豊かな子どもを育てます。
- 人と人、地域とのつながりを大切にする子どもを育てます。
- ICTなども活用し、国際社会へと視野を広げる子どもを育てます。
- 放課後における研修・研究時間を週一回は確保し、実践的な研修・研究を組織的に行っていきます。

友だちとのかかわりの中で、互いに学び、高め合おうとする子どもの育成

～小集団による学びを効果的に取り入れた授業の実現～

(1) 分析チャートからの考察

■チャートの傾向

- ・学力、学習意識、生活意識と、すべての領域において市の平均を上回っている。
- ・特に4年生と6年生の学力の高さが顕著である。
- ・生活意識はほぼ均等である。
- ・学習意識はどの学年も高い。

■分析

- ◎学年に関係なく、各教科の学習に対して「好き」や「大切であると思う」と回答する児童の割合は、市の平均を上回るとともに、ほぼ均等である。
- ⇒学習集団としてみたとき、総じて学習意欲が高いために、「子どもにとってわかる、魅力ある授業の創造」が不可欠である。定着のみを目的としたドリル的な学習活動や、知識を注入する「しっかり教える」視点からの指導に偏ると、学習集団は物足りなさを覚えると考えられる。グループ学習などで意見交換をしながら思考力や判断量を高め、「しっかり引き出す」授業展開が求められていると言える。
- ⇒同時に、各学級の個々の児童の特性をつかみ、それぞれの持ち味や課題を集団の学びにどのように位置づけるか、学びそのものをどのように保障していくか、という点について、質の高い指導が求められているともいえる。個と集団の学びを保証するための授業を創造するために全力で取り組む必要がある。
- ◎生活意識調査の結果をみると、一見「十分である」と誤認してしまいがちであるが、「学力に比べて生活意識の高まりは低い（特に3年生以上）」ということも言える。
- ⇒規範意識を高めるために、適切な行動を常に評価しつつ、不適切な言動については的確に指導を重ねていくことが求められている。「話の聞き方」「学用品の使い方」「学びのルール」を定着させ、「この場面ではどのようにするのがベストなのか」「集団にとってよりよい結果をもたらすためにはどのように行動すればよいか」について、問題解決的な展開を進めていく指導が有効だと考えられる。

(2) 平成27年度 目標と具体的方策

日々の授業では、一斉授業だけでなく、学習内容によってグループ学習を取り入れながら効果的な学びができる授業をしている。本校の児童の実態から、昨年度に引き続き、小集団による学習を取り入れることで、児童が人と関わることの楽しさを感じたり自信をもって発表できるようになったりすることをめざしている。また、発表だけの聞き合いだけでなく、発表～聞き合い～比べ合いをすることで友だちの考えを自分に取り入れることができ、考えの幅が広がったり、人と関わることの楽しさを味わったりすることができる。このことをふまえ、問題解決的学習を取り入れた授業から児童が問題意識をもち、その解決に向けて仲間と学び合いながら追究していく授業を行う。

子どもたちの課題を踏まえ、子どもたちのよさを生かした高いレベルの学びにしていくために、一昨年度から小集団による学びを効果的に取り入れた授業をめざしてきた。小集団での話し合いでは、一つのグループの人数が少ないことから、発言することが苦手な子どもも気軽に発言できたり、全員が授業に参加したりすることができる。小集団により学びを授業内に取り入れた結果、普段の授業で発言がない児童がグループ内で堂々と自分の考えを言うことができたり、自分の考えを聞いたもらったことで認められたと感じる児童が増えたりした。今年度も同様に小集団によるグループ学習を効果的に取り入れることで、自分から友だちと関わる場面を多くつくり、自信をもって考えを発言したり、友だちの考えを最後まで聞き、考えを深めたりする子を育てたいと考える。

(1) キーワードのとらえ

◆豊かな感性

○自分をとらえる

⇒自分の持ち味、課題を発達段階に応じて自覚し、その伸張と改善に取り組めるようにする。

⇒自分に向き合い自己を受容するとともに、自己を高めることに喜びをもてるようにする。

○他者をとらえる

⇒家族、友だち、地域の方、社会そのものと望ましいかかわりをもてるようにする。

○周囲をとらえる

⇒文化、自然、歴史などに興味をもち、ものや事柄を自分の生き方に取り込めるようにする。

◆確かな学び

○着実な学び

⇒基礎・基本の定着を徹底する。

○問題解決的な学び

⇒情報を的確に受け取り、調査・分析したり、関係づけたりして問題の解決を図れるようにする。

(2) 個々の取り組み

◆集団での学びの充実

○一人ひとりの問題意識をもとに学級の学習問題を設定し、小集団で考え合いながら、問題の解決に向けて追究していくような学習展開を心がける。

○取り上げる言語活動に対して、その表現の特徴をもとに、発達段階に応じた（低・中・高別に）指導内容を明確にした授業づくりを行い、言語活動の充実に努める。

○語彙力、情報活用能力を育成するために、学校図書館およびパソコンスペースを充実させるとともに、読書活動や調査活動を重視する。

◆個に応じた指導の充実

○自分の感じたことや思ったことだけでなく、友だちの考えに対する自分の考えを書くことができるようにする。また、書いたことを友だちに伝える場面を設定する。

○児童一人ひとりの興味関心や学習状況などを座席表に記録したり、それをもとに指導案を作成したりしながら個を生かした学習指導を行う。

○保護者の希望に応じて特別支援教室を組織的・計画的に活用する。

○20分間の中休みを生かして、校庭で一緒に体を動かしたり教室で会話したりするなど、教職員（特に学級担任）はできる限り児童の姿を見つめられるようにし、児童理解に努める。

◆家庭・地域との連携

○学校運営協議会発足を機に、授業参観や運動会等の様々な場面で地域や保護者の方に学校運営に関して評価をしていただき、学校と地域・家庭が共通した意識をもった学校運営を実現する。

○家庭との連絡を密にし、コミュニケーションを取り合いながら情報の共有や指導の方向を合意し合い、家庭生活を基盤とした学習・生活指導の確立をめざす。

○美しが丘西保木地区の文化的・人的な資源を学校教育に取り込み、本校が「地域の全ての方々にとっての学びの拠点」となるようにする。

(3) 組織の取り組み

◆「教師として切磋琢磨し合える同僚性をはぐくみ、互いを高め合う」ことをめざす。

○本校の教育課程を作成する過程で学力向上に向けたキーワードを視点とした「研究授業」を実施する。

○各教科領域の教材研究に取り組むとともに、各学級児童の様子を語り合い、個の理解を深める。

